

# 特別支援教育コーディネーター支援に関する実践の成果と課題

北九州市立養護教育センター  
山本 康子

キーワード：特別支援教育コーディネーター、コーディネーター研修、校内支援体制、巡回相談

## 1. はじめに

北九州市は、小学校134校、児童数約53000人、中学校63校、生徒数約25000人、養護学校8校、児童生徒数約800人（平成17年5月1日現在）の政令指定都市である。

通常の学級に在籍する児童生徒も含め、障害のある児童生徒に対してその一人一人の教育的ニーズを把握し適切な教育的支援を行う「特別支援教育」への転換を踏まえ、本市では、各学校における特別支援体制の構築がその急務である。そこで本センターでは、特に小中学校での校内支援体制づくりへの支援を策定し実施している。

## 2. 本センターの取組の方向性

### (1) 学校の校内支援体制づくりの現状

平成16年度末の時点で、校内委員会の設置率は小学校95%、中学校80%、特別支援教育コーディネーター（以下コーディネーターとする。）の位置づけは小学校95%、中学校70%という状態である。校内で支援する体制は徐々に整ってきたが、実際のコーディネーターへのアンケート（平成16年度）からは「コーディネーターの仕事内容がわからない」という記述が多く、校内委員会等で具体的に何を行っていけばよいかかわからないことで困っている状態であった。

### (2) コーディネーター養成の構造化

校内支援体制が有効に機能するためには、学校で子どもたちに実際に接するコーディネーターが中心となり、主体的に子どもたちの支援に取り組み、実践していくことが重要であると考え。そのためには、コーディネーターの専門性の向上とその専門性を学校で生かしていくことができるような支援が必要である。

そこで、北九州市立養護教育センターでは、特別支援教育の専門性を柱とした3層構造を考え、そこに養成研修を位置づけることによってコーディネーターの効果的な養成を図った。（図表1）

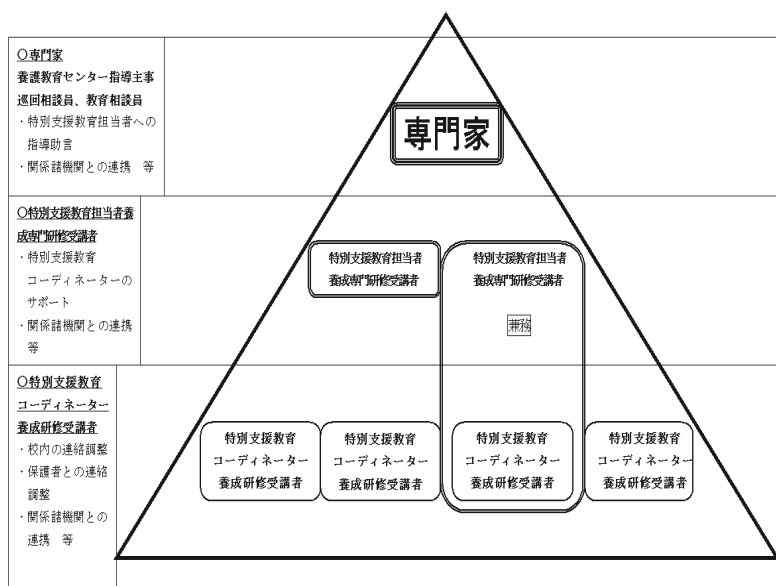
### (3) コーディネーターへの支援内容 具体的には、次の二つの支援を実施することとした。

#### ① 人材育成のための養成研修

- ・ 特別支援教育コーディネーター養成研修
- ・ 特別支援教育担当者養成専門研修

#### ② 巡回によるサポート

- ・ 全小中学校への巡回
- ・ 特別支援教育校内体制モデル校への巡回
- ・ 専門家チームによるサポート



図表1. 専門家、特別支援教育担当者養成専門研修受講者、特別支援教育コーディネーター養成研修受講者の3層構造

### 3. 取組の実際

#### (1) 人材育成のための養成研修

人材育成のために、計画的に実施している二つの研修を、具体的に紹介する。

①特別支援教育コーディネーター養成研修

- ・校内の連絡調整、相談窓口、コーディネーターとしての役割
- ・平成16年度より3ヵ年計画で実施
- ・年間90名程度
- ・全小中学校から1名ずつ受講要請

番号	研修内容
①	LD・ADHD児の理解と対応
②	北九州市の福祉行政 北九州市における特別支援教育の取組
③	特別支援教育コーディネーターの役割とその実際
④	学校・保護者へのコンサルテーション
⑤⑥	校内支援体制の実際Ⅰ・Ⅱ

②特別支援教育担当者養成専門研修

- ・地域の相談窓口、コーディネーターのサポートとしての役割
- ・平成15年度より5ヵ年計画で実施
- ・年間20名程度
- ・本人の希望により受講（校長の推薦が必要）

番号	研修内容
①	LD・ADHD児の理解と対応
②	事例研究法
③	発達障害概論
④⑤	検査法Ⅰ：WISC-Ⅲ
⑥⑦	検査法Ⅱ：K-ABC
⑧	進路指導と自立支援
⑨	ソーシャルスキルの指導
⑩	学校・保護者への支援
⑪	アセスメント概論
⑫	個別の指導計画作成
⑬	教科の指導Ⅰ：読み書きの指導
⑭	教科の指導Ⅱ：算数の指導
⑮	学校における配慮事項
⑯	事例検討会
⑰	研修成果発表会・研修報告書

#### ①特別支援教育コーディネーター養成研修

＜⑤⑥について内容の一部紹介＞

- ・中学校のコーディネーターより「関係機関との連携を支援に生かす取組」の実践発表
- ・講師の国総研総括主任研究官 廣瀬由美子先生より実践事例の講評、特別支援教育の基本的な考え方や支援と援助、その意味、コーディネーションの仕方等についての指導助言
- ・当センターの実態把握チェックリストを用い、6人グループで事例をもとに協議、講師より協議の流れと意義についての構造化の提示と指導助言
- ・連携シートからオーダーメイドマニュアルの作成について講師の指導助言

＜研修受講生のアンケートより＞

- ・「コーディネーターとして、何をしたらよいか、具体的な内容で参考になった。ケース会議や校内委員会、共通理解のための職員会議の大切さがよくわかった。職員に理解してもらい、設けていきたいと思う。少人数の演習などでいろいろな話が聞け、とてもよかった。」

#### ②特別支援教育担当者養成専門研修

＜⑩について内容の一部紹介＞

- ・チーム援助とコーディネーションの重要性、チームシートやプロフィールシートについて講師の筑波大学教授 石隈利紀先生より指導講話
- ・受講生を4人グループで、母親、担任、養護教諭、コーディネーターの役割でロールプレイによる演習、チームシートの作成演習を通し、コンサルテーションの実際について講師の指導助言

＜研修受講生のアンケートより＞

- ・「ロールプレイを通して、相手の立場に立つことの難しさ、チームで支援することの難しさと楽しさを感じた。」「それぞれの良い面をチームで見つめながら子どもにとってプラスとなる支



写真1. ロールプレイの研修をする受講生

援をしていきたいと思っ  
た。」

## (2) 巡回相談によるサポート

### ①全小中学校への巡回

各学校のコーディネーターが、研修で身につけた専門性を、実際の学校で組織的に生かすことができるように、巡回相談員が全小中学校を巡回し、コーディネーターを中心とした校内支援体制づくり推進への支援を行なった。

方法としては、二人の巡回相談員が、16年度は全小学校、16年度は全中学校を巡回し、気がかりな子どもの授業・行動観察を行った後、担任、コーディネーター、管理職等との協議において指導・支援に関する助言等を行なった。

17年度は、特に管理職に対し、学校の特別支援教育校内支援体制の実態を把握し、その上で校内支援体制の構築に取り組んでもらえるよう、巡回時に評価項目の○×チェックをお願いした。(図表2) なお、この評価項目については、1月末時点での再評価を依頼している。

この評価項目をチェックしてもらうことにより、校長先生にコーディネーターの役割について認識してもらうことができ、学校における課題についての意識づけとなった。

また、校長先生に、次のことについて依頼をし、コーディネーターを中心に、学校で校内委員会の実施が円滑にできるようにした。

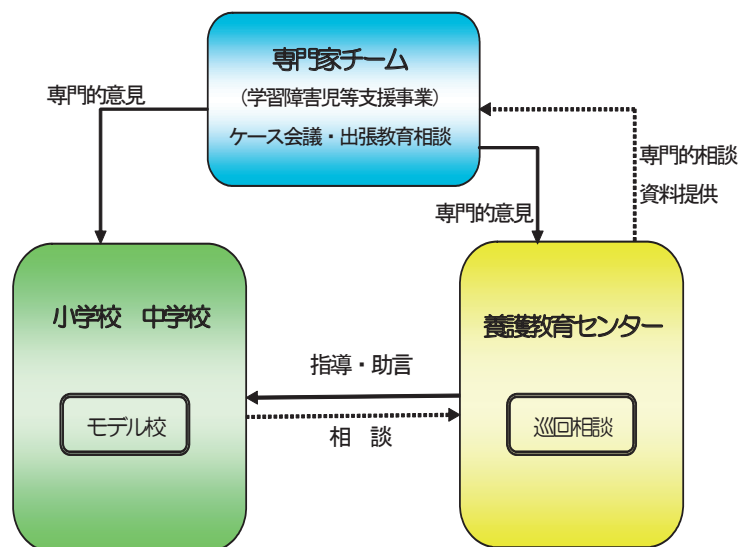
- ア. 授業・行動観察等をコーディネーター、管理職等に可能な限り一緒にしてもらう。
- イ. 協議については、担任、コーディネーター、管理職等、関係職員の参加を呼びかけてもらう。
- ウ. 協議の司会、記録をコーディネーター等に分担してもらう。

### ②特別支援教育校内体制モデル校への巡回

平成16年度は、全小学校への巡回を2回程度実施した。そこでさらにコーディネーターを中心とした校内支援体制づくりを進めることをめざし、17年度は、応募による小学校のモデル校5校に対し、継続的な巡回(年間5~6回)を実施した。(図表3) このサポートにより、コーディネーターが中心となり、①授業・行動観察を教師同士が行い、記録をとること(図表4)、②実態を教師自ら把握することから、協議が深まること、③専門家チームとの連携をとこと(写真2)、④個別の指導計画の作成と実践、評価を行なう等、モデル校においてコーディネーターが機能的に動く様子がみられるようになった。

①	教師一人の支援から学校全体での支援をしていく必要について、全職員で共通理解が図れている。	
②	校内委員会を設置し、コーディネーターを指名している。	
③	コーディネーターが、校内研修の企画と実施を行っている。	
④	コーディネーターが、校内における連絡調整に当たっている。	
⑤	コーディネーターが、担任の相談をもとに、児童生徒の状況の整理を行っている。	
⑥	コーディネーターが保護者の相談窓口を行っている。	
⑦	コーディネーターが、校外の関係機関等との連絡調整に当たる仕組みができています。	
⑧	定期的に校内委員会を、実施している。	
⑨	関係機関の情報を、校内委員会において生かしている。	
⑩	校内委員会で、対象児童生徒の校内支援体制について協議している。	
⑪	校内委員会における協議を生かし個別の指導計画を作成している。	
⑫	本校独自の校内支援体制が整備され、運営している。	

図表2. 平成17年度特別支援教育校内支援体制に対する評価項目



図表3. モデル校への養護教育センター・専門家チームの支援

